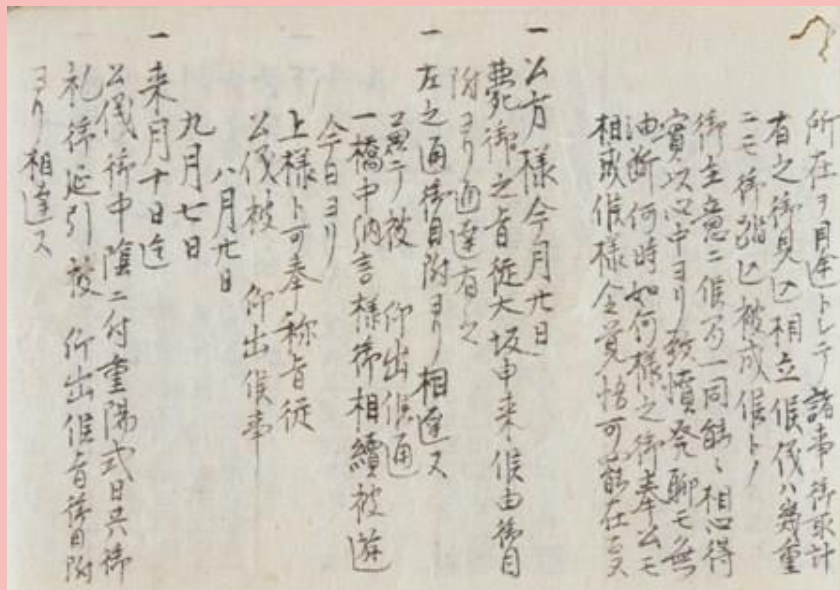


第 31 回 松江藩士の幕末維新期の記録

『松江市史』編纂のため、史料編纂室では松江に関する様々な史料を収集しています。今回ご紹介する史料は表紙や前部分が欠けていますが、仮題として「富谷家日記」(野津敏夫氏所蔵)と付けられた文久4年(1864)から明治7年(1874)の松江藩士の勤仕記録です。

藩士の勤功の記録は、各藩士から提出されたものを編集した「松江藩列士録」がありますが、「富谷家日記」は「列士録」記載以後のことや、より詳細な内容が記されており、幕末から新政府へ移行していく変動の時代を、一人の藩士の動向を通して知ることができます。



富谷家は初代門蔵が安永8年(1779)に18石5人扶持で新番組に組入り、以後、地方頭取となり、寛政7年(1795)に80石に加増、3代目が大御番組から江戸御銀奉行、御作事並御破損奉行等を勤め、加増を重ね、弘化5年(1848)に130石となっています。この記録に記載される4代目門蔵は嘉永2年(1849)に130石の家督を継いで勘定奉行、木実方・人参方寺社修理方等の役目を勤めています。

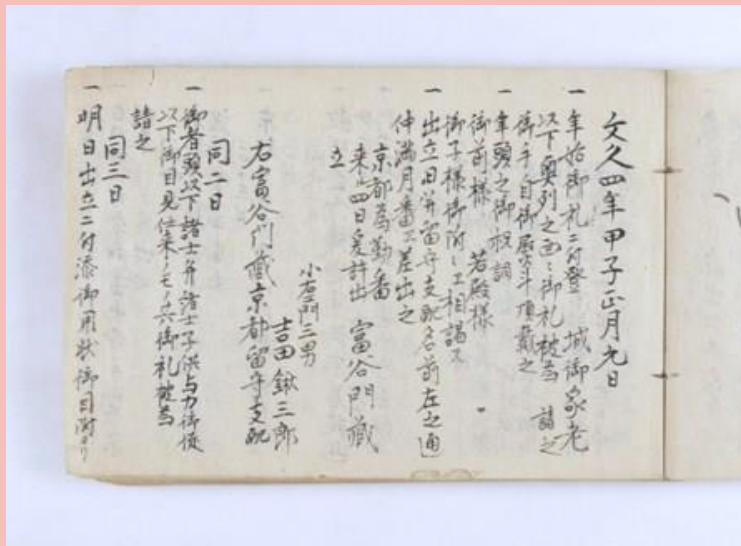
「富谷家日記」は、4代目門蔵由章が文久4年(1864)に軍用方掛り合として京都勤番となった頃から、明治7年(1874)5代知和へ家督を相続するまでの記録です。

毎年の年始の御礼の登城、殿様・若殿様・お子様方への拝謁、重陽の御礼、殿様の御位階昇進お祝い、東照宮250年忌法会執行等、藩士の日々の役目を記し、下記のような藩からの達や藩に受理された文書写等、またそれぞれの復命書や提出書類写等が細かく記録されています。

文久4年(1864) 3月 元治と改元。

元治元年(1864) 11月 朝日千助の供として芸州広島の惣督府へ派遣される。

- 慶応元年(1865) 9月 嫡子無く、知和を養子として許可される。
11月 門蔵の後妻縁組を許可される。
- 慶応2年(1866) 8月 公方様(家持)薨御。一橋中納言(慶喜)様御相続。
- 慶応3年(1867) 正月 門蔵が神門郡口田儀台場へ遣わされることになり、留守家族は
祖母と息子は息子の実家吉田家へ、妻も兄の家へ分散して引越し、御小人3人が留守
家屋に置かれた。
- 慶応4年(1868) 2月 大橋筑後の供として、因州鳥取へ派遣される。
- 明治元年(1868) 11月 此度の御改革で御用人役仰せ付けられる。
- 明治2年(1869) 12月 松江藩権大参事に任ぜられ、1等列下として神谷彦左衛門の次座に任命。
- 明治3年(1870) 10月 藩政改革により従前の等級給禄一切廃止され、更に士族一等に給禄32石宛遣される。
- 明治5年(1872) 正月 神社氏子調御規則達せられ、届書を提出。
同年 3月 所持の小銃届達せられ、届書を提出。
同年 4月 9等出仕申付けられる。
同年 4月 屋敷図面差出す旨達せられ、届書提出。
同年 6月 通称を名乗る旨達せられる。(門蔵→由章)
同年 8月 戸籍編成に付き、一戸人員書出の達。届書付。(由章45歳)
同年 9月 実印鑑差出を達せられ、届書提出。
同年 10月 所持の船数届達せられ、届書提出。
同年 11月 体調不良により息子知和を名代とする。この頃から何度も辞表提出するが慰留されている。
- 明治6年(1873) 3月 下男下女の雇状況を届けるよう達せられ、届書提出。
明治6年(1873) 4月 徴兵令布告。10月に長男知和18歳にて届書提出。
同年 6月 第一区小学開校に付き、満6歳より13歳のもの書出を達せられ、長女かね6歳3ヶ月
の届書提出。
同年 8月 屋敷地券受取に付き、税差出す。届書提出。
- 明治7年(1874) 3月 体調不良により長男知和へ家督相続する旨の届書提出。



門蔵由章は京都や大阪へ派遣され、また家老朝日丹波や大橋筑後の御供をして広島や鳥取へ出向く等、藩の重要な役目を担い、明治2年(1869)には大参事神谷氏の次座として権大参事となり重職を勤めます。その間体調不良により度々辞表を提出しますが、その都度慰留される人材でした。46歳で家督を5代知和に譲っています。

なお、この記録以外に富谷家の所蔵史料として旧『島根県史』編纂の際に筆写された史料中には、原本所蔵者として富谷由慶の名前が記載され、「治国譜写(朝日丹波著)」「大円庵様・円漂院様・齊貴公様・セイ楽院様御直書写」「覚書 土井堀御下屋敷ヨリ青山御屋敷へ引移件」「羹牆之巻(こうしょうのまき)」「藩の儒学者宇佐美シン水への書状集」等、10数冊が確認できます。

また、『松江市史 史料編6 近世Ⅱ』所載の「諸御条目御書出写」(藩の法令集)の表紙裏には、2代目門蔵二助の名前が記されています。富谷家では代々の門蔵が勤めを果たす上で必要と思われるものや教養の一環として、筆写し所蔵されたものと思われます。

(平成26年3月7日 史料編纂室 北村久美子)